惨禍・ネパール

ヒマラヤ水系で大洪水

▶上◀

異常気象の今年、南西アジアのヒマラヤ水系は七月中旬、大洪水に見舞われ、特にネパールではダムが崩壊、死者は約二千人に達するなど大きな被害を出した。世界最貧国の一つに数えられるネパールは、この大洪水で国内政治体制のもろさをも露呈、開発と援助のあり方を考えさせることにもなった。災害当時、環境と開発状況を調査するため現地を訪れていた援助問題に詳しい高山一義・元外務省専門調査員が洪水禍のネパールを報告する。

森林伐採で被害拡大

死者2千人 千年に1回の規模

七月十九、二十の両日、ネパールの中、東部は史上例のない豪雨に見舞われ、ネパール経済は致命的な打撃を被った。首都カトマンズの南西二十キロ、日本の援助で建設されたクリカニ水力発電所のダムの第二キャンプ・サイトでの降雨量は、十九日が二三四ミリ、二十日が三六〇ミリで、最も激しい降雨をみた地域の一つだった。集水面積が二六平方キロの広さのダムの水位が十七時間で二七・一メートル上昇したといわれる。

急ぎ東京から現場入りした日本人技術者は、ダムが放水した水量とダムに流れ込んだ水量から算出すると、約千年に一回の洪水になると測定した。

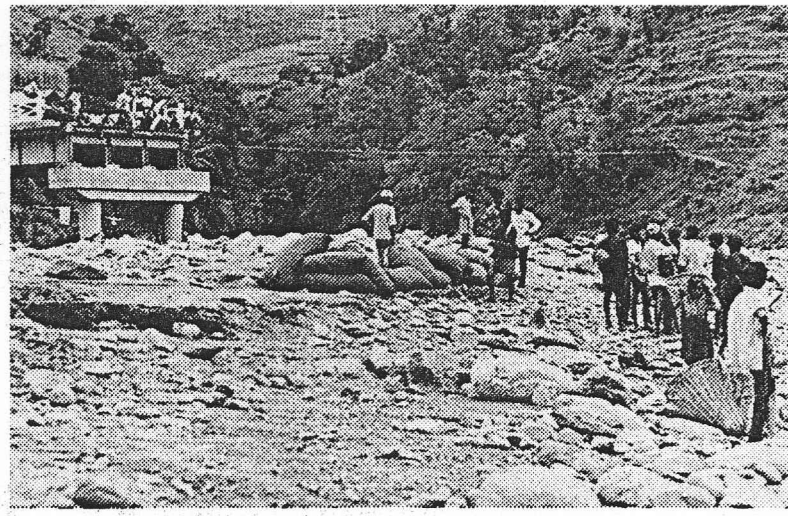
この洪水がいかに激しいものであったかは、ネパールの年間降雨量が約一五〇〇ミリであることからも理解できよう。山間地や丘陵地では地滑り、インドと国境を接するタライ平野部で洪水に見舞われ、全国七十五郡のうち十五郡で橋が百三十八カ所、ダムが十カ所で流出した。

道路網も寸断され、インドからの供給に頼っている日常生活物資の流れが止まってしまったため、人口百五十万人のカトマンズは陸の孤島となっている。必需品のまきの入手は不可能で、炊飯は全面的に灯油に依存しているが、列に並び二時間待って二リットル、一日待って三リットル入手出来れば良いほうだ。

在ネパール日本大使館の小林茂専門調査員は「七月十七日から二十一日の間に平年の二〇〇%相当の降雨があった。流出したバグマティかんがいダムは計画洪水流水量を、毎秒八千立方メートルとして設計され、百年に一回の洪水に耐え得ると考えられていた。しかし、今回の洪水でバグマティ川上流の流水量は一万五千立方メートルと観測されるなど計一万八千立方メートルが流れたことになる。計画水量の二倍以上で、信じがたいとの声もある」と話している。

今回の洪水の原因の一つとして、森林の消失が挙げられる。過去、ネパールは豊かな森林資源を有し、その資源は住民の運営により持続性が保たれていた。しかし、一九五七年にネパールは森林保護を名目に森林を国有化した。その結果、森と住民の関係は敵対的なものとなり、住民は激しく森林を伐採した。政府も財源を求めて大規模な伐採許可を乱発した。これから生じた財源は、国庫より政治家や王室の懐を潤した。

国連食糧農業機関（FAO）の調査では、七五―八五年のネパールの森林減少率は年率三、四%で世界一位だった。森林伐採が進むなかで、ネパール政府の林業部門長期総合計画が八九年、援助国・機関により承認された。しかし、その内容は、すべての計画が予定通り進んだとして、二〇一〇年に一九八五年のレベルに回復するという厳しいものであった。



カトマンズ南西約10キロ、アグラ川の洪水で流された橋＝高山一義氏写す